

122

25

15

開卷驚奇俠客傳

089297-001-3

122-15

俠客傳 (開卷驚奇)

滝沢 馬琴 / 著

[刊年不明]

DBM-0635



122
25
15

東 京 圖 書 館

和書門	小說類	函	架	號	冊
		三六	三六	三六	三五

用
天
文
學
叢
書



曲亭主人著 溪齋英泉畫

開卷驚奇俠客傳

第壹集

天保重光單閱
羣玉堂精刊



俠客傳第一集自序

明治十一年文換

如譏非

曰大道廢有仁義仁義者道之異稱也
而有似而非者故韓非比儒俠擯斥之曰儒

以文亂法俠以武犯禁二者皆譏而學士多
稱於世云夫俠之為言彊也持也輕生高氣

排難解紛孔子所謂殺身成仁者是已司馬
遷及傳游俠其序援韓子且曰季次原憲聞

巷人也讀書懷獨行君子之德不苟合當
當世亦笑之又曰今游俠其行雖不軌於

羣玉堂印

義然其言必信其行必果已諾必誠不愛其軀赴士之阨困既已存亡死生矣而不矜其能羞伐其德蓋亦有足多者此有憤激而言之是以其語厚而意深也斑固不原此意以其進奸雄譏之可謂誤矣今于彼書檢之則有延陵孟嘗春申平原信陵之徒皆卿相富厚之俠也至如閭巷之俠又有朱家田仲王公劇孟郭解數人自漢而後迨唐有劍俠有女俠小說所載不遑毛舉也

國朝自古必有其人在焉但無論記傳載之以余所聞近世有大鳥居逸平關東小六幡隨長兵及號茨城草袴白柄大小神祇者皆是閭巷之俠而其所為或未必合於義帝立氣齊作威福結私交以立彊於世者也較諸古者道德之士不動聲色消宇內之大變者相去非唯宵壤而已然氣豪以此至捍當世之兇暴此戰國之餘習未改其私義廉潔以有然也使當時無此人則士風自是衰俠客

之義曷可少哉。余有感焉。而無所憤激。不激
不憤。猶且傳俠客所以然者何也。蓋以仁人
抱道。猶不免菑。是故新田。殂于足羽。楠氏陣
歿。湊河大凡。此二公誠忠。與日月爭光。德義
流芳。而不旣惜乎。枝葉不再。振榮枯得喪。與
南朝終始矣。是以世人不平。以爲遺憾。余之
固陋。不敢自料。寧思欲排其難解。其紛叨補
舊記之闕。文慢載野乘所未言。演義立傳。以
快_中人之心。若夫興絕顯隱。非游俠則其事不

潔。使人心愉快。非寓言。乃其談不博。無財而
能俠。其俠此益奇也。用滑稽善談。罔不出人
意表。宜名不虛立。書不虛行。竊有賴于此。又
惡問虛之與實哉。是書數十卷。然後可以結
局。今茲所著才五卷。是爲第一集。其第二集
以下。應陸續刊行。云浪華書賈羣玉堂。與江
戶書賈文溪堂相謀。乞余之著。三四年矣。此
塞其責者。及刻成。聊亦識歲月。

天保二年端午前一日

曲亭蟬史撰



開卷驚奇俠客傳第壹集總目錄

卷貳

第壹回

製青囊 著演 購 封白紙 英直 託 孤 君

第貳回

依遺訓 賢童 知 踣 踏 迎旅 櫬 義士 憐 母子

卷參

第參回

照黑夜 螢火 導海濱 誇明察 鼠輩 被恥辱

第肆回

陰德 入老 御得 奴 婢 陽卜 綠鬪 鷄 倡 主 僕

卷肆

第伍回

演便 宜 老尼 薦 村 酒 謁 林 住 南 將 感 舊 綠

卷三

第陸回

福草 村 三 兇 奏 奇 功 釀藥 酒 郡 領 詳 來 歷

第柒回

七里 濱 洪 波 洗 衆 惡 千葉 城 土 療 埋 潮 毒

第捌回

啓衣 箱 小 六 得 遺 書 救癩 疾 著 演 失 銅 筭

第玖回

御士 二 遇 癩 病 人 光棍 初 懺 悔 舊 惡

卷五

第拾回

相摸 川 小 六 視 橫 死 遊行 寺 著 演 葬 螟 蛉

第一集總目錄終

本集起南朝元中九年至北朝應永十八年春秋大九二十箇年小說第二集陸續刊行

野上史著演

豪俠氣節其名若雷
虚已博愛仗義散財
寡欲自守不容禍胎
至信共患旅櫬得回
一堆枯骨初睡夜臺
空緘屈處克保嬰孩

贊著演



藤澤 晩稻

たのみおれをわら
る乃迹をゆ
るは海夷川路
まの唇う絲

贊英直

館大六
英直



客店目四郎

脇屋右少将義隆



精忠三世
傳迄是君
南史雖絶
猶有遺文

贊脇屋少将 雕窓

藤白隼人正
安同

草あみひひり
片む月の露け
海あや入るむ
まゝる流まゝる
新田主僕
燭六郎二
時種



新田
左少将

貞吉

千葉介
兼胤

順逆如、因人多捷天
巧恣權詐、藥鳩仙
勢利資、榮惡冠當年
皇天既定、冥罰豈愆

雷
平

妙算
錢ト
克



たらしめらるるおつれさう
あけまれのあろく
かろくまゝさのけくぬ
質小六並母屋

雷
平

姉
母屋

館小六
助則

像
第五



俠客傳第一集列傳姓名目錄

將相。新田貞方。脇屋義隆。足利滿兼。足利持氏。

上杉憲定。千葉介兼胤。

武士。野上史著演。館大六英直。畑六郎二時種。上泉秀武。

鳥山七郎。船田小二郎。堀口五郎。江田藏人。高柳兵庫。藤白安同。

田子勇傳二。荒海灘藏。荒海船藏。野上奴婢之助。館小六助則。

婦人。晚稻。母屋。信夫。女僧妙算。

市人。逆旅主人肝八。姿鏡屋甲。紅粉阪小正二。臺町猪三太。

相摸川竹高師。客店目四郎。

奴隸。字六。画七。畑平。畔藏。

通計三十有五名第一集姓名目錄終

開卷驚奇俠客傳第一集卷之一

東都 曲亭主人編次

第一回 青蓮の製りく著演觸體を購ふ

白紙を封く英直孤君を託す

鹿苑院足利義満相國の將軍たり。應永の年秋と。相摸州高座郡藤

澤道場の左盡頭野上史著演と喚做する。一個の御士ありける。その祖貫を尋

る。美濃の野上の人氏なり。莊司著實と喚れ。源平壽永の圍戦。東軍の

從ひ。兵糧運送の古を學り。始終その功あり。源氏一統の後。鎌倉の攝

藤澤南御の邊。莊園三千餘貫。賜り藤澤東西八ヶ邸の目代を授け

是より數世を累て。今の著演。大なる野上自著佐と。後醍醐天皇

元弘三年閏六月の鎌倉攻戦。新田義貞朝臣の從ひ。又兵糧運送

更とて日あるの功ありあはれぬ新田足利の確執の程も世に又乱れぬ
 賞の沙汰もさるる判南九西朝の事さるる義貞朝臣の足利の陣
 惜と世に憤り退隱と遂亦足利家の權使の徒
 鎌倉將軍の時よりと所帯不易の御教書賜る郷士さるる
 絶々の讀書の事とて戦國の稀なる博士とてあはれぬ好人の師
 素よりその名を會する人知らぬも年六十中とて身もろその子史著演
 著演の総角より文と學と武と嗜む心より父祖の方と既壯年及び此二
 親の喪の在るに三年よりとるは儀也常の妻晚稲の忠臣の革命の時
 孝子の終身の喪ありしも今に在るも豈一日も忘れぬ且偉大父の當初
 新田殿に従ひしも南朝の事一臂の力と事也今に足利一統の世あり

更とて日あるの功ありあはれぬ新田足利の確執の程も世に又乱れぬ
 賞の沙汰もさるる判南九西朝の事さるる義貞朝臣の足利の陣
 惜と世に憤り退隱と遂亦足利家の權使の徒
 鎌倉將軍の時よりと所帯不易の御教書賜る郷士さるる
 絶々の讀書の事とて戦國の稀なる博士とてあはれぬ好人の師
 素よりその名を會する人知らぬも年六十中とて身もろその子史著演
 著演の総角より文と學と武と嗜む心より父祖の方と既壯年及び此二
 親の喪の在るに三年よりとるは儀也常の妻晚稲の忠臣の革命の時
 孝子の終身の喪ありしも今に在るも豈一日も忘れぬ且偉大父の當初
 新田殿に従ひしも南朝の事一臂の力と事也今に足利一統の世あり

新田足利一統

新田足利一統

伴と取らむけの儀は、あつたは、しつぱんき、きり、西へ回るといふもの、その折毎に推辞の、
る形の、ごう、あつ、入る、人、竊に、これを、諫めて、千刃の、海、側、との、人の、好、い、量、
、知ら、ぬ、もの、あつ、徳と、慕、ひ、ごと、ま、救、ご、もの、各、も、宿、所、の、向、対、を、
東西と取らむと人の及、及、所、行、た、る、中、に、搗、鬼、あ、り、然、る、ま、困、窮、若、
の、儀、の、誘、く、會、の、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、
受、の、疑、く、名、を、詔、ぬ、の、居、所、を、借、り、由、を、言、ふ、も、施、行、の、義、が、違、ひ、て、人、辱、
の、不、似、と、を、食、悲、人、の、素、亦、の、論、を、その、人、由、緒、あ、る、の、外、の、世、の、事、あ、る、に、飢、渴、
は、勝、ち、地、の、救、は、俺、が、と、を、根、底、り、棄、て、欲、す、素、生、を、回、す、人、の、ま、ま、は、な、ら、ず、
は、れ、の、義、も、あ、つ、と、東西と、興、へ、く、る、名、を、回、す、ま、ま、の、虚、實、あ、る、出、の、機、念、を、
と、ま、緩、ま、る、人、告、ご、を、困、窮、者、あ、る、ま、ま、の、方、に、行、は、な、す、と、竊、偷、ま、る、
る、は、優、美、の、俺、の、實、業、と、言、ふ、と、奴、婢、を、ご、ま、ご、ま、く、使、ひ、ま、ま、妻、子、の、鹿、布、を、被、せ、
身、も、亦、疎、食、と、嘆、へ、る、義、の、為、財、と、惜、み、親、の、箕、末、を、兼、り、只、施、ま、ま、と、
ま、ま、一、日、の、疎、略、せ、し、ま、ま、れ、と、軍、の、と、莊、園、の、水、旱、の、患、も、又、年、來、俺、の、戰、
場、の、事、の、あ、る、もの、を、わ、る、軍、兵、の、乱、妨、の、有、る、福、の、あ、る、と、施、ま、ま、の、年、來、俺、の、
も、然、ら、ず、東西の、場、の、事、陽、報、の、れ、願、ひ、の、天、醫、を、ご、ま、ご、ま、く、使、ひ、ま、ま、の、
説、論、を、諫、の、感、嘆、と、恥、と、悔、と、あ、つ、ひ、の、儀、を、野、上、若、者、演、ひ、の、飽、心、地、
や、あ、つ、一、日、の、里、の、杜、使、と、彼、を、召、取、ま、酒、を、飲、ま、示、ま、ま、の、徃、元、の、
擾、乱、の、近、比、ま、五、六、十、年、都、鄙、の、閉、戦、絶、れ、と、戰、場、の、尸、も、曝、露、と、野、
徑、の、草、葺、肥、と、の、抑、幾、億、方、名、を、い、つ、傳、る、あ、つ、集、る、あ、つ、就、中、不、便、を、
名、も、あ、つ、棄、武、者、雜、兵、矢、石、の、命、を、損、へ、の、頸、を、捕、ま、ま、の、あ、つ、亡、骸、を、
と、還、る、身、方、も、亦、早、れ、の、白、骨、の、路、傍、の、砂、石、を、俱、に、朽、ち、あ、つ、し、は、な、ら、ず、

と、還、る、身、方、も、亦、早、れ、の、白、骨、の、路、傍、の、砂、石、を、俱、に、朽、ち、あ、つ、し、は、な、ら、ず、

治世の黄門ありて侍人必髪髭髪を剃りて其の脛毛を剃りて襦袢袴袴を被りて
 夜毎の種子種々時々生蓮鬘鬘を戴りて唐山を以て内官あるものありて
 割去るものありて黄門を喚ばし。那男子の子を産む。鐵經・明辨の入佛ある
 ことを説いて五種の黄門の凡そかほ類々名を以て肩膊半釋迦の衣を被りて
 経の在りては願ふ掩身の黄門は嗣のる過世するもの獨澤末末石婦とて七
 去の罪を負せざる。俺們夫婦の宿願空しく。あはれと後まゝの天を家と亡き歎く
 ところも甲斐者の。無事をとて推禁め。後まゝのものありて。話分西頭の時陸奥
 州信夫郡関之渡瀬の岡里の館大六郎英直と喚ばる。南朝餘類の浪人の妻を
 名を母屋とひけり。原是新田の親族あり。大館氏の支流也。父祖の時より義兵助
 助。義治治。父子は後軍功あり。徳を功全く。大父は北國を戦歿。父を四
 國あて身まらけり。是より以降英直の義治の嫡子あり。脇屋右中將義隆朝臣の

義隆朝臣
 義隆朝臣
 義隆朝臣
 義隆朝臣
 義隆朝臣

仕へる累世忠義の老當りたる。脇屋義隆朝臣。南朝の建徳二年の正五位下
 相摸守に任せられ。後天授三年の從四位下。右中將陸奥守に拜任せられ。陸奥の
 國司の。は。當時這地在任して。再從父兄弟の左少將良方朝臣。新田義隆朝臣。兵
 侶の足利方の大敵と志く。挑戦し。三年來も。歴々程々。後龜山天皇の元中九
 年の秋の比武家。足利氏。も。戸管。和陸。請勸め。時の將軍足利義満朝臣の
 及大内義弘と。吉野の行宮へ参ら。北朝の當今帝。後。南帝。後龜山天皇の
 御猶子の。御。且。次の日。南帝の皇子と。御。即。と
 類の奏。ま。南帝。御許。の。年。十月。吉野の。自。居。を
 坐。嵯峨の大覚寺。渡。御。北朝。後。の。御。契。約。を。定。め。れ。

是の月の初五日の御讓位の義より。三種の神器を北朝に譲渡あり。是より後龜山天皇を新院と稱し。是より中間一稔を歴する。應永元年は春

二月の廿三日新院先規の如く太上天皇の御子と爲りて猶且嵯峨の大

覺寺に仙居不定のひら往る延元元年の冬十二月廿二日後醍醐天皇御の

るべき武臣足利も氏皇本道と遊むるを吉野に臨幸すまをしその後村十後

龜山も愛小御世更らるひて五十もの七稔の春秋を歴する今の時か南朝北

朝両天皇稍御合體ましくけれの麻の如くか木能れお世の果もる風波のたて長雨

くまぶらんと甘民秋ひびきみ似む武家足利もその旨南朝の公爲武臣

憎むし刺太上天皇後院の皇子を春宮お立たすも経ひとてと前約の疑を

るり南朝忠義の御相雲各累世義烈の武臣門の齊一怨憤りて或山林

隠遁し或も孤城を成て戦歿するものむの住れ新田村の世々柄を魂

義胆武勇智略も今ゆる施御非のまをる自方の漸く落七く有數系も演

樹下の漏る雨歎きくるる新田自方義隆の雨大將のせん柳も二園定地を退

ひて且く時運を俟んと自方朝臣残兵二百名ある後へ越路を投ては浴め

隆ぬも残る士卒三十三名可ぬて武藏相模の隠れき自方の勇士を取入んと

次を夜襲を旅衣五名七名主後分引らむと張の月も管軍は首途起光を包む

玉鐙のみの真きすむが濁る世の田字草末積の浴かぬるの外視射射

くる鳥と牙を做まむの媚竹のまの里を夜もたも落ひまをひける時

年の秋九月はさるるの時の中右少將の郎君九才あるものも陸奥大

れの這郎君の母上は亦是新田の氏族も大館左馬頭氏義隆の女弟を

君の外祖するける大館左馬頭兼伊豫守氏明也の當初新田贈中納言義貞

隊の属して特武勇の答あり惜むべし貞國二年六月二年二十八

任國陣敷しける嫡子上総権介氏宗ぬ正平七年北朝の秋九月

二十七の日本國社と申す二男大館左馬頭氏義主の初名と弥三郎とのひける

二

七

十

二

十

十

十



あけの日のあけの
旅ともお根のあけ
のりう入るまゝ
右



左
賑々たる古骨
豪俠言做仁

十有餘年

十有餘年

十有餘年

介後叙爵して後五位下右馬介補任せられ天授二年北朝の承徳三年の秋九月軍功は賞され
 志は從五位上を昇進し左馬頭も兼ねられたる。尤も武略の達人として義隆朝臣と共に陸
 奥の在りて武家の大敵と戦ふと屢ある。天授六年北朝の康徳二年の冬比流矢の爲に傷
 られる。金瘡竟か愈ぜずして年二十九で卒せり。然れども氏宗氏義隆兄弟の父多る。
 大館二郎宗氏主元弘三年北朝の正徳二年夏五月新田殿襲の隊に属して鎌倉を陣取せし
 より父祖二世中心義隆を南朝の爲に始終死力を盡したる勇將なり。其母の世や
 皆是足画餅とあり果て郎君の爲に。後見せし者も。勝郎君の母上は産後の
 病者者肥立むと五稔前ふ世を逝ぬ。今亦父は將の折と勢方究りて往方も定めぬ
 落上のみを緯訪ふの軒端の松風篁夏子の下は鳴く虫の外の絶てる葉の。獨
 大六英直の大館氏の庶流也。忠臣に受貳のもの多ければ。郎君生れぬ。比より英直を
 傳られて妻の母屋を郎君の姪母とせられた。只是の事あり。義隆四十一の歳に

郎君生れぬ。俗の四十二の歳見。信子二親の母の。俗の。義
 隆朝臣の義の據として郎君の襁褓の中も大館氏に冒して。英直が見ると
 よと。乳名三英直の俗稱。因して小六九と名づけ。母の。信子と由緒の主たる
 義隆武藏落の折英直夫婦を召近して。俺今自方。旭を爲武藏。授て
 封じ。那首との敵地の。安危を越。料。救。推。使。取
 地所爲。然ら。武運。由。父子一所。敷。遺恨の。汝。這
 地。由。迹。埋。貌。變。小六九。守。育。今。番。の。伴。先。途。者
 た。ん。の。遙。小。優。第一の忠臣とあり。宣示。七家の系図。重代の
 菊一文字の名。英直の預け。英直の妻の母屋。共。小六九。無。姓
 姓名。変。形。貌。と。関。渡。瀬。の。回。宇。楫。鎖。の。冷。呂。編。小。白。屋。未
 未。僅。小。膝。と。容。鄙。語。の。食。山。の。空。の。壁。論。の。漏。の。貯。禄。と。

三つねの英直の筋竹と磨屋の母屋の糸を綴るまじりの細煙をたいたの海東西足
 りのまじりの英直の一個の女見のまじりを信夫と吸做するが小六九と同庚を今
 茲五才のまじりの母屋の乳傳の口はこれよりも乳母と字せし英直が小六九の傳と
 府城と落したる女見信夫が乳母の身の暇を取せり。今主従親子の左の右のと
 育つ。年稍七才のまじり秋城隍祭の試樂の日信夫のまじり外中より入るるまじり
 されん往方のまじりるり。英直母屋の敬馬喜ひて日歴をまじり彼此に送り候き
 索のまじりの見の傳のまじりし忠義のまじり格を傳郎君のまじりのまじり
 深のまじり世のまじり小六九と英直の家子と入る告て苟のまじりのまじり小六九の
 成長の後のまじり信と素生を知らしるるまじり何事のまじり歳月を麻生
 隨小六九の英直親子のまじりの親の女弟をまじり時信夫のまじりいかに
 袂を濡し候まじりの孝友の賢のまじりまじりまじり。英直母屋の厚まじり下まじり嶋

通鳥のまじり遣の瀬のまじり日。艱苦の中の年園て心永も既ふたる。十年まじり小六
 九の年の稍九才のまじりまじり去歳の春より英直真生活の暇の毎も習讀書を
 教まじり行儀正しくのまじり。性伶俐のまじり一まじり二まじり知。子貢の賢才のまじり
 一人権せざるまじり又れ子路の武勇のまじり久後憑りければ英直夫婦は快くまじり
 ついてかかめ麻のまじり君の將のまじりまじり。五松のまじりまじり。御本まじりまじり。これの
 果の蠶伏れてまじりまじり。然とて訪んまじり其方の空を左のまじり
 くらし不樂のまじり存る。今茲二月の下院微吹との風の音信あり。義隆朝臣のまじり
 来武藏相摸路の世を澄びて。權因のまじり武士勇卒を招集んとまじり世のまじり勢の
 ひて義のまじり道を守り稀のまじり怒のまじり毛を吹た疵を求るまじりまじり。遠慮と旅
 多ふ立とまじり光陰を送るまじり。去歳より相摸の厚朴のまじり某甲許御座まじり
 腰痛のまじり病病まじり起居自由まじり。あま六十年まじり比陸奥の戦場を。

体言巨細小詰却退於母屋より。夫またの月比大心勞苦のひら。とるや有らん。
 病症疾心痛也。霜相露のほるぬ。一町も歩行を怠へ。瘡る目まで。這田と。困
 る者とのゆひ。耳に。方某と。吹咀。之復を。来め。と。然程。小母屋の宿の
 泥爐を。借り。其。前。良人。小。小。六。九。心。心。側。と。去。と。慰。め。六。七。日。を。歴。は
 程。其。直。の。絶。え。せ。病。苦。聊。銀。夜。日。も。呻。吟。ま。り。か。ま。不。一。日。の。半。碗。の。粥。を
 喫。ま。る。の。ま。け。然。る。旅。の。悲。し。みの。身。の。痺。見。の。杖。前。向。の。指。と。漢。人。の。草。枕。徳
 旅。宿。の。病。臥。り。瘰。癧。と。氣。力。の。衰。を。な。す。就。は。な。り。て。妻。子。と。心。の。言。愛。の。遺。
 方。絶。て。ま。ま。の。の。目。睡。の。夜。毎。小。杜。船。も。不。如。婦。と。鳴。く。い。は。適。の。
 れ。陸。奥。より。遠。く。來。け。る。悔。し。も。神。の。告。佛。の。呻。り。願。甲。斐。の。夏。樹。植。鎮。守。の
 神。社。へ。兩。個。と。送。代。の。幾。面。の。の。熟。る。朝。夕。夕。暮。の。雪。と。一。花。も。長。日。景。は。斑
 消。て。ま。ま。の。免。月。も。既。か。晦。途。く。ま。り。比。鎌。倉。より。ま。ま。の。旅。客。們。が。ら。譚。を。重

紙戸隔る。這方の夫婦。心とも。程。那。旅。客。の。ひ。け。る。隔。屋。少。將。義。隆。主。の
 年。來。相。摸。る。所。親。許。深。く。潜。び。て。け。し。を。知。る。の。ま。り。近。曾。志。あ。れ。の。從。者
 絶。ふ。四。五。名。と。俱。て。親。姑。山。峯。の。麓。路。る。底。入。君。赴。の。且。湯。治。志。の。程。の。都。御。の。人
 氏。の。け。藤。白。棚。九。郎。安。同。と。喚。ぶ。武。士。の。少。知。り。快。推。寄。て。討。捕。れ。る。竊。の。夜
 戦。の。准。備。と。ま。る。の。身。の。隊。兵。の。と。及。土。兵。野。武。士。們。之。招。取。へ。百。四。五。十。名。迎。梅。雨。降。を
 揚。る。雨。の。声。姑。く。鳴。を。静。ま。せ。て。馬。乘。找。め。一。棚。九。郎。四。下。小。御。聲。く。声。計。め。く。宮。方。の。浴。人
 安。同。が。又。勢。を。以。向。の。遣。ひ。逃。ま。る。兵。們。と。呼。ぶ。声。と。共。侶。の。聲。一。競。の。守。隊。の。軍。兵。世。に
 一。戸。を。打。破。り。て。先。と。争。ふ。三。十。名。不。管。三。七。二。一。細。入。の。さ。け。の。義。隆。主。の。近。野。島
 侍。船。田。二。郎。鳥。山。七。郎。堀。口。五。郎。江。田。高。柳。五。郎。彼。五。名。過。ざ。れ。る。孰。か。奴。臣。勇。士。の。必

死の覚期此も懸る。さうゆつうの。隨ふまゝ大刀に被撃し。稠々敵と砍外。駈散
 敷も靡けて。此を先途と戦ぐる。烈々修煉の刀尖に向ひ。誰も免と。真額利刺創
 車斫鎌の。蔓とたえ。瞬間の三二十人鮮血塗れて。輾るもの。兩個成て伏す。の
 枕と並。敷れ。ゆれ。奇。の視。餘。大勢。れ。物。と。せ。自。方。の。戸。散。と。踏。踏。を。嘯
 叫。直。攻。の。前。一。自。方。の。遮。ら。れ。後。と。の。比。皆。う。の。前。刺。て。透。間。々。射。う。け。矢。柄。を。今
 降。雨。の。敏。糸。鳥。夜。の。是。め。く。鎗。長。刀。の。雲。間。と。使。う。月。も。隈。の。り。ける。本。書。敷。と。突。戦
 何。山。果。一。も。見。え。づ。け。り。あ。の。あ。れ。の。由。衣。冢。の。勢。入。鐵。石。の。あ。ら。れ。然。一。人。當。千。松
 田。鳥。山。江。田。堀。口。高。柙。們。一。個。と。七。數。人。所。深。瘡。と。負。ぬ。も。り。け。れ。是。ま。と。は。ひ。け。近。く
 敵。と。引。組。ん。で。刺。違。々。雨。夜。の。星。と。ま。づ。づ。一。歩。も。去。り。で。戦。死。ま。け。し。身。く。得。之。る。勇。士。を。一
 有。任。程。の。義。隆。主。の。出。居。の。杉。戸。を。看。み。り。用。心。の。為。枕。の。建。る。角。う。合。と。差。詰。り。詰
 敵。十。四。五。名。射。て。下。り。る。箭。前。種。の。竭。ん。と。せ。折。近。臣。們。の。皆。敷。れ。る。訪。然。と。退。て。腹

切らんと。獨語。臥房。を。投。入。り。藤。白。見。弟。を。甲。子。勇。傳。次。佐。と。見。て。鎗。を。拵。り
 跟。り。來。り。耶。と。言。被。て。刺。せ。し。義。隆。以。り。身。を。反。一。蜂。巻。左。の。無。苗。め。透。さ。右。の。あ。て
 抜。合。る。又。頭。を。さ。さ。り。擲。ち。の。寛。達。の。勇。傳。次。の。胸。前。と。擊。ち。串。れ。て。苦。と。叫。び。声
 と。共。仰。反。仆。れ。息。絶。り。その。間。義。隆。主。の。與。る。一。室。が。銀。で。腹。撥。切。て。俯。の。自。取
 期。本。月。廿。四。日。夏。四。月。の。真。夜。中。比。の。ふ。と。享。年。四。十九。歳。と。な。す。一。痛。の。世。江。名
 將。南。朝。股。肱。の。武。臣。の。一。も。三。年。の。大。義。時。至。り。命。運。其。外。場。の。藤。白。連。が。創。死
 軍。慮。を。攻。惱。ま。れ。て。腹。を。斫。れ。る。と。至。斬。る。然。程。藤。白。連。九。郎。安。向。の。隊。勢。が。下
 知。と。脇。屋。殿。の。首。級。を。賜。り。各。の。餘。近。臣。五。名。の。首。級。も。知。り。た。り。その。名。を。尋。ね。て
 一。箇。々。の。牌。を。付。首。級。叙。め。相。推。た。て。次。の。日。官。領。の。海。館。に。あ。り。て。任。じ。た。り。ま。り。一。つ。の
 當。主。鎌。倉。の。管。領。足。利。滿。兼。朝。臣。の。孫。斜。り。の。身。に。射。て。首。級。実。檢。の。和
 柙。九。郎。の。首。級。を。義。隆。の。朝。敵。を。且。當。家。累。世。の。鎌。倉。の。身。に。射。て。首。級。実。檢。の。和

若根山をとりかへし今ゆゑ
をさしあふちうさうくさう
底倉藤白撃右成將
みけのまりのたげとあは



多しと云ふ。比の。さへ。往方と云ふ。一かゝり。知る。よ。さ。う。の。安同。輒。討。捕。す。ま。つ。
 せ。の。神。妙。の。義。京。師。注。進。集。及。の。日。室。町。殿。の。大。の。さ。の。満。足。の。思。ひ。の。酒。造。
 回。の。功。賞。と。く。安。同。の。氣。賀。底。倉。不。莊。の。賜。の。入。隊。兵。の。功。の。威。威。状。を。取。
 へ。今。よ。の。本。府。在。任。と。忠。勤。を。励。む。と。み。づ。く。仰。下。ま。れ。け。れ。相。九。郎。の。身。餘。
 る。思。ひ。拜。し。と。退。け。の。後。而。又。の。次。の。日。義。隆。主。後。の。首。級。共。由。比。の。濱。邊。の。島。に。
 一。頃。目。前。め。て。來。る。の。為。体。の。休。ま。る。の。野。間。の。内。海。也。義。朝。主。の。數。れ。と。
 又。の。孫。頼。家。卿。の。伊。豆。の。修。善。寺。也。統。れ。も。這。回。底。倉。の。義。隆。主。の。數。れ。も。
 皆。浴。室。に。傳。れ。源。氏。の。大。將。達。の。三。箇。さ。く。浴。室。の。死。所。の。不。思。議。の。事。
 の。説。と。寝。ま。説。話。と。相。宿。の。外。の。良。れ。を。知。る。良。の。一。調。高。の。訛。声。の。時。旅。宿。の。
 眞。實。遣。人。會。然。の。と。正。心。の。嘆。息。の。外。さ。の。海。邊。の。母。屋。初。の。頭。願。權。一。良。人。
 と。俱。の。敬。る。耳。裏。胸。の。内。の。苦。の。泣。き。の。下。と。禁。の。啼。啼。の。袖。の。涙。の。玉。露。の。

中。正。と。ま。知。ら。ぬ。小。六。九。さ。義。の。聰。け。快。の。世。の。轉。変。の。卷。の。捺。る。憾。も。英。真。の。堪。
 の。秋。心。歎。送。恨。の。腸。斷。也。忽。地。胸。塞。す。と。一。声。高。く。叫。び。血。を。吐。く。と。野。の。仰。さ。る。
 撞。と。倒。れ。母。屋。の。小。六。九。も。何。の。と。散。馬。駈。の。抱。起。り。呼。活。る。声。も。主。
 人。も。走。り。來。り。共。侶。の。勸。め。人。を。醫。師。の。宿。所。へ。走。る。口。來。り。茶。と。飯。の。御。扱。の。由。め。
 けれ。や。英。直。の。や。の。主。人。と。醫。師。の。飲。む。の。氣。の。ぬ。ぐ。枕。の。就。む。と。
 左。の。右。も。本。復。の。心。の。と。ね。と。り。と。睡。れ。ぬ。隨。の。通。宵。の。久。後。の。深。念。と。さ。る。右。は。
 將。の。御。武。運。微。く。數。れ。の。一。と。さ。え。小。俺。亦。あ。命。終。ら。誰。う。又。郎。君。守。無。か。
 艱。育。せ。新。田。の。餘。類。と。知。る。と。會。數。捕。ん。と。め。の。と。一。日。の。宿。を。致。し。の。る。世。の。
 る。の。せ。の。せ。の。藤。澤。の。野。上。史。著。演。と。喝。れ。る。最。饒。裕。の。御。士。の。世。の。有。
 の。家。傑。也。義。と。守。る。と。城。の。如。く。悪。と。痺。む。と。仇。の。若。く。弱。を。資。け。衰。る。と。憐。と。生。平。に。
 施。と。好。と。財。財。と。惜。ま。る。の。性。と。く。俠。氣。の。勢。利。の。謙。を。權。家。の。媚。び。と。御。向。

身まゝの通り一過世のついでにそのおのれを知らず女のみひる十才の足らぬすひり
 るが鄰知らぬの旅宿で住る不幸かひの心細く察しあつた後よりの世に
 高里に敵まゝあるついでに其まのついでに亡夫の送言の言首のついでに送言のついでに藤澤
 亡夫の昔由縁のついでにその名をうけるこの間の他はまゝとておのれ人野上史と喚ぶ
 地方の世を歴し御士はゆり年来疎遠のついでに頼み身引請て其のまゝ母子の
 うへに翁のついでにせまらざる下妻の風を亡骸の行轡のついでに乗と藤澤へ俱とてまはす
 このまゝとて過世のついでにその主人のついでに野上夫人の高名のついでにこの
 人まゝの大なるおのれ慈善ゆくと使氣の戦死の觸體一萬餘級と其まのついでに仁者か
 らせられの優る由縁のついでに然る人まゝの近御のついでに知り病中まゝとて生還の
 のついでに眞愛苦の他支を送れぬのついでに女儀の脱落は是非及び然るに任はらるらん
 箇様々ふまゝとて翌の準備と助言の快桶のついでに柩をその囃氏の買取りとて

その身も軀も徳も其眞の亡骸と件の柩の飲めけり徳而母屋のその通宵良人仕
 柩をうち成するその甲夜間小六九の密に示さる阿見のまゝ知らるる公を
 新田の餘類も脇屋殿の御家臣の公は御主君少将の陸奥と送るゆい
 折敷の執送されておん在処も知らぬ今茲に相模の底倉の御座をゆい
 実の那処へまゝとて起りぬ甲斐もある二日路の足る程の病疴の爲に推由ら
 本意を遂げ御主君の底倉を敷かれぬ公も送る世と送りて其のついでに
 及ぶる御向の報り野上史のついでに吾侪のついでに對面を各々も這面をゆい
 されぬ昔歳を公と我と結ぶ弟とぬり兄とぬれ好めぬ骨肉の親類も優
 まで憑りぬん那処へまゝとて高せよと送りぬあつた世の憚り親子は人を
 人の知られて其の難義我か及人のついでに決りぬついでに小六九年尚十の足らぬ
 角を知らぬのついでに知る過せかたも竊にふりて見期をゆい

外なる渡りのひそと生口とちひさく小六九の落涙を振絞ら頭を擡て貌を更夫仲らけ
 たるひの脇屋殿の陸奥と落させぬ比の備四五才許る時の有つる果
 夢の心地と人の噂めくもの親の故主とせしを知らし一を悔しけ今ゆのひる
 まつる各々公のう小恙あるも那処もあつる者で俱に戦致あつた左の右も存命と
 本意の慥せぬ人か愁生送つる俺身も多し恨るれ故主の讎言敵那藤白を
 討捕く神人慰めぬら且く俟せぬ腕と扼し母屋の吐嗟と推禁め
 声高一人のやうん獅子の生れその目も百獸威伏の勢ひの蛇蝎の僅一寸の物を吞
 と欲まる氣ありとのひの俗のうふも似る年あり倍て遅く讎言を敷んとつて叱るあわね
 ぬ潜れぬ世と澄が身の出るくの華ひるん及ぶると多し起と氣色と人の悟らざる親
 身と亡べ不覚のものとせると徹られて小六九の過言るた多しけん誠然然り
 たるも口を針する然程の夜の母屋の主人小僧僧と醫師の謝銀極の價

行轎の損料もつら随に送る還て後ちと思ひ候も首の夜の向明と
 る此の豫て宿より詭る兩個の轎夫の時と違へ平常使輿をうち肩掛下
 徳々と呼門也主人の躬と指揮と極と擡起さる件の使輿か無せなとは是より
 先小母屋小六九早飯と薦らねて奔一膳の向ひたるは折れは著の進ま身装
 ち行果衆の使輿の附け親子も馳ひく草鞋と提りたる主人并の家は
 多し婢們的別れ苦る口誼の胸の寒さの聲響く哀情もつる程か夫の
 明て茂林とさる鳥の声も常かかつて心裏哀しく涙の路のさる去向の僅か坂
 東路一里二十里のぼる最の日長た比れたるまじり午ある間件の使輿
 引添ふも藤澤の御約束の世知られる野上の宿所の隠れあつた母
 屋の使輿とち卸さく故意後門より找入の西三声呼門程の執次の若黨も
 心と分たて立出る登時母屋の小腰を折めて奴家の這里の御主人の親類甘木甲が

ひろ元弘の功ありていふも義貞亡きをのりて世に情の退隱せしむる不肖の俺身に至り
 まて出て足利家の仕立に那英真の事を知りて知らぬを左にせられたる
 今も母子と家お留めて羈旅の難義を極み未見の知己お背く父祖の送念の遠
 ふお似る嗚呼おるりと立地の尋思する母屋お對ひて自今示談せられたる輝の趣実か由
 あり館生とさゆる時天地お柱言義を結ぶ竊の異姓の兄弟おのりてこの御
 程遠くぬ假名川の旅亭お病々おまもも告の来はりけり只この訪が
 長を別れおるる送賦を惜しむ如自筆の書見贈るもの妻の子の訪
 佈おのりて強面おのりてまた況の終分暗して係町筆さ一通お送られたる今も疑
 へのおのりて此お人意おのりて母子のうへお若演お身お引受て生涯疎野
 委の杖も極と子息お何処お送らぬ詰まぬ初も側お若指おせと俺身
 隔のさる世お瀕く美引れる人の誠お又袖濡る母屋の鼻おららぬと年来良人の

陳遠より一書書契でお違ひせぬと美らお心お敷中お敷おる人の為あり
 是お優る追薦お亦おらるるお小六お極お成らて後門前お送一措おは輝
 恁と報知せぬと辱くお快おはとらと推林おめておる雲時
 這首お坐せお俺もお礼服お更めて俱お極お迎おと輝お説示と俺も
 りお一個の若黨お志おらる遠くお来おける側お招お近らておはるる後門
 前もお末客おの然お用おる俺俺お成らる旅櫛おの日假名川お客店お身
 まる俺親類の亡骸お今俺お迎おられお女お老僕お共侶お在客お許お俺
 俺恁と報て極お成れお快おとと追お遣らる母屋お對ひて目今おはる
 某お奥へ退るお母女子お来意お趣お荆妻お知おるお衣袋お更らて極お這首お入
 きてお且お允らと辞と俺お追おるお登時お若演お妻の晩櫛お母屋親子の縁
 説示お件の機密おのりて英直お年来の義お兄弟おのりて極お凶服お衣

127
25
15



